甲賀市文化財報告書　第18集

甲賀市埋蔵文化財調査年報

平成21年度試掘調査　宮町遺跡第38次･第39次調査

２０１１

甲賀市教育委員会

序

滋賀県の東南部に位置する甲賀市は豊かな自然に恵まれ、国指定史跡「紫香楽宮跡」・「垂水頓宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」などの歴史資産も豊富です。甲賀市には現在、500 余りの埋蔵文化財包蔵地が確認されており、その数は県内でも有数です。また、甲賀市は関西圏と中部圏の中間に位置し、新名神高速道路が市内を横断し、今後、市のさらなる発展も期待されています。

埋蔵文化財は地中に埋もれている性格上、目にする機会が少ないものです。しかし、地中に埋もれているからこそ、郷土の歴史を知るもっとも身近な歴史資料であり、先人が残した貴重な文化遺産です。このような埋蔵文化財を様々な開発から保護し、さらに記録に留めることも教育行政の大きな責務です。

教育委員会では市内の様々な開発に伴い、埋蔵文化財の試掘調査・確認調査を実施しています。その中で地域の歴史を語る上で非常に重要な知見を得ることが出来ました。調査成果をまとめた本報告書が甲賀市の歴史を解明する一助となり、市民の皆様をはじめ、広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、調査に参加していただいた方々、報告書作成にあたり、ご協力をいただいた方々に心より感謝を申し上げます。

平成 23 年（2011 年）3 月

甲賀市教育委員会
教育長　山 本　佳 洋

例　　言

1. 本書は甲賀市教育委員会が平成 21 年度に実施した試掘調査と、国史跡紫香楽宮跡（宮殿地区）で史跡の内容確認のために行った宮町遺跡第 38 次調査（平成 20 年度）および宮町遺跡第 39 次調査（平成 21 年度）の内容をまとめたものである。
2. 本書で報告している試掘調査および内容確認調査にかかる経費は、国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫補助金）および滋賀県文化財保存事業費補助金（県費補助金）を得た。
3. 甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。

平成20年度	平成21年度
甲賀市教育委員会事務局	甲賀市教育委員会事務局
教育長　國松嘉仲	教育長　國松嘉仲
歴史文化財課長　雲林院治夫	歴史文化財課長　林口幸治
課長補佐　林口幸治	課長補佐　大﨑哲人
係長　鈴木良章（埋蔵文化財係）	係長　鈴木良章（埋蔵文化財係）
技師　小谷徳彦（調査担当者）	主査　小谷徳彦（調査担当者）
技師　渡部圭一郎（調査担当者）	技師　渡部圭一郎（調査担当者）
主事　西野久俊	主事　西野久俊

4. 本書の執筆・編集は鈴木良章（第 7 章）、小谷徳彦（第 1 ～第 6 章）が行った。
5. 本書で使用した水準高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第Ⅵ系（日本測地系）に準拠する。なお、本書で用いる北は座標北である。
6. 本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、甲賀市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　平成 21 年度調査の概略 …… 1
第２章　09-04 次調査　貴生川遺跡隣接地 …… 3
第３章　09-07 次調査　北脇遺跡 …… 5
第４章　09-09 次調査　東罐子塚古墳 …… 11
第５章　09-22 次調査　矢川寺遺跡 …… 15
第６章　09-23 次調査　西林口遺跡 …… 19
第７章　宮町遺跡第 38 次・第 39 次調査 …… 23

第１章　平成 21 年度調査の概略

甲賀市は滋賀県の南端に位置し、滋賀県全体の約 12％を占める面積 481.69ｋ㎡の規模である。琵琶湖に接しない内陸部に位置するが、市内には国道１号や新名神高速道路が横断し、大阪・名古屋からそれぞれ 100ｋｍ圏内にあることから、近畿圏と東海圏を結ぶ役割を果たしている。

また、市内には総数 540 ヶ所あまりの埋蔵文化財包蔵地があり、紫香楽宮跡、甲賀郡中惣遺跡群、垂水頓宮跡の国史跡をはじめ、泉古墳群や甲賀群集墳など古墳、織豊系城郭の水口岡山城跡など歴史的に非常に重要な遺跡が数多く存在する。

近畿圏と東海圏の中間点に位置する甲賀市は近年、開発の件数が増加し、それに伴う発掘調査の件数も増加傾向にある。平成 21 年度は年間 27 件の試掘調査を実施し（図 1）、調査面積の合計は 3,537.60 ㎡であった（表 1）。27 件のうち、周知の埋蔵文化財包蔵地内での調査が 5 件、埋蔵文化財包蔵地近接地での調査が 9 件、それ以外の調査が 13 件であった。また、遺構を確認した調査が 2 件、遺物が出土した調査が 6 件あったが、記録保存の対象となる遺構や遺物を確認した調査はなかった。

本報告書では試掘調査の主要なものと、宮町遺跡第 38 次・第 39 次調査について、調査概要を報告する。

表１　試掘調査一覧表

調査次数	調査開始日	調査終了日	調査地			調査目的	遺跡名称	調査結果				
			町名	大字	対象面積			調査面積	遺物	詳細	遺構	詳細
09-01	H21.4.22	H21.4.23	土山町	前野	3,679.85	倉庫建設		150	○	土師器、陶器	×	
09-02	H21.4.27	H21.4.27	甲南町	杉谷	105.99	通信アンテナ	前野遺跡	20	×		×	
09-03	H21.5.12	H21.5.22	水口町	本綾野	21,113.57	宅地造成		575	○	須恵器、土師器、陶器	×	
09-04	H21.6.15	H21.7.10	水口町	貴生川	40,000.00	区画整理	貴生川遺跡	900	○	土師器、陶器	×	
09-05	H21.7.13	H21.7.13	水口町	水口	3,584.28	集合住宅	水口岡山城	34	×		×	
09-06	H21.7.27	H21.7.27	水口町	鹿深	238.01	個人住宅	古御殿遺跡	12	×		×	
09-07	H21.7.29	H21.9.14	水口町	北脇	18,050.08	店舗建設	北脇遺跡	700	○	須恵器、土師器、緑釉陶器、瓦器	○	溝、ピット
09-08	H21.7.30	H21.7.31	土山町	市場	5,527.00	工業団地		165	×		×	
09-09	H21.8.19	H21.8.20	水口町	泉	100.00	養生	泉古墳群	100	×		×	
09-10	H21.9.15	H21.9.16	水口町	水口	1,058.82	集合住宅	水口岡山城	50	×		×	
09-11	H21.9.17	H21.9.18	甲賀町	神	1,698.00	駐車場		65	×		×	
09-12	H21.9.30	H21.10.1	水口町	北脇	300.00	児童クラブ	北脇南遺跡	25	×		×	
09-13	H21.10.13	H21.10.13	信楽町	西	6,764.75	陶土の採掘		25	×		×	
09-14	H21.10.27	H21.10.29	水口町	虫生野	1,000.00	病院		30	×		×	
09-15	H21.11.5	H21.11.5	甲南町	野尻	976.52	個人住宅		50	×		×	
09-16	H21.11.18	H21.11.18	信楽町	牧	2,174.28	駐車場		40	×		×	
09-17	H21.11.26	H21.11.26	水口町	宇川	1,980.76	集会所		50	×		×	
09-18	H22.1.18	H22.1.18	水口町	伴中山	1,688.25	駐車場		50	×		×	
09-19	H22.1.19	H22.1.20	甲南町	杉谷	5,095.00	駐車場	前野遺跡	180	×		×	
09-20	H22.1.5	H22.1.5	甲南町	竜法師	600.00	児童クラブ		30	×		×	
09-22	H22.2.15	H22.3.10	甲南町	森尻	36.40	防災設備	史跡甲賀郡中惣遺跡群	35	○	土師器、瓦	×	
09-23	H22.2.24	H22.3.11	水口町	西林口	9,980.94	宅地造成	西林口遺跡	277	○	土師器、陶器、瓦、瓦器	○	
09-24	H22.1.22	H22.1.22	土山町	頓宮	2,204.57	公民館	上出遺跡	100	×		×	
09-25	H22.2.12	H22.2.12	信楽町	長野	2,090.12	資材置場		60	×		×	
09-26	H22.3.19	H22.3.19	水口町	名坂	734.76	集合住宅		15	×		×	
09-27	H22.3.15	H22.3.15	水口町	水口	1,881.95	コンビニ		50	×		×	
09-28	H22.3.8	H22.3.8	水口町	泉	7,272.53	工場	下川原遺跡	25	×		×	

調査次数 09－21 は欠番

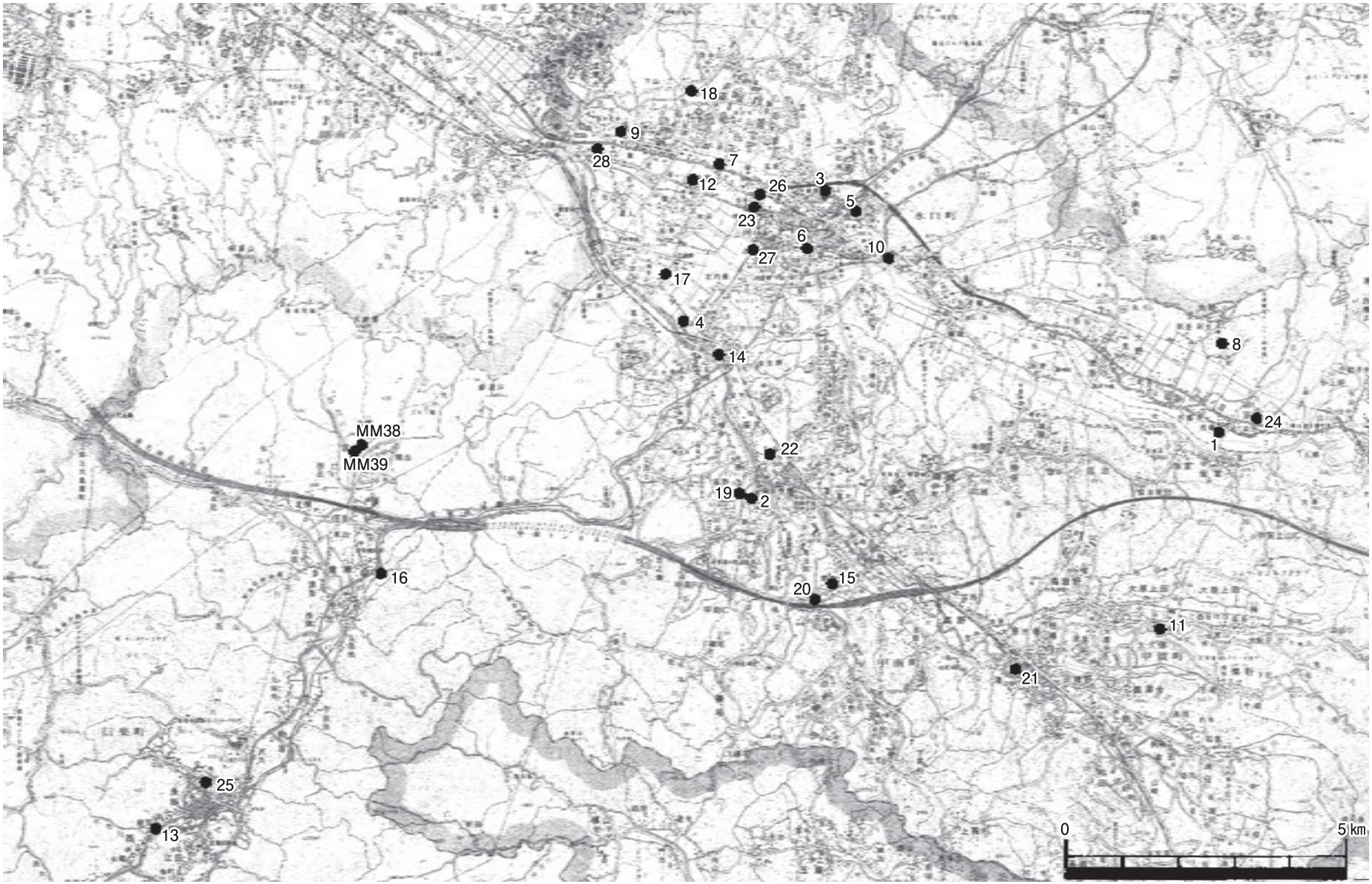


図１　発掘調査実施位置　１：100,000

第２章　09-04 次調査　貴生川遺跡隣接地

調査経緯

水口町貴生川に位置する貴生川遺跡は、平成 20 年 12 月に土地区画整理事業の計画に伴って実施した試掘調査によって発見された（試掘調査 08-27 次）。この調査では、梁行 3 間 × 桁行 3 間の総柱の掘立柱建物を検出したほか、大量の瓦器や土師皿が廃棄された方形土坑などがみつかり、中世の集落が存在することが判明した（甲賀市教委 2010）。

今回の調査原因は前述の土地区画整理事業と一連のもので、試掘調査 08-27 次調査の南側が今回の調査の対象範囲となった。北側隣接地で中世の集落の存在を窺わせる遺構や遺物がみつかったことから、集落の範囲がさらに南に延びる可能性を考慮して調査を実施した。

調査は開発対象面積 40,000 ㎡に対して、トレンチ 17 ヶ所、合計面積約 900 ㎡で、平成 21 年 6 月 15 日に着手し、7 月 10 日に完了した。

調査概要

《基本層序》

調査地の基本層序は、上から①水田耕作土、②水田床土、③黄褐色または灰褐色粘質土、④灰色または淡青灰色砂、⑤砂礫層であった。現況の水田地表面から 50 ㎝前後で③層上面に到達する。遺構検出は基本的に③層上面で行った。なお、トレンチによっては③層がなく、②層直下で④層となる場所もあった。④層および⑤層は、流水性堆積の可能性が高いと考えられる。

《検出遺構》

各トレンチで水田暗渠および水田耕作に伴う溝を検出した。それらの暗渠や溝には切り合い関係がみられ、複数の時期のものが存在する。ただし、埋土からは近世や近代の信楽焼が出土するため、古く遡るものとは考えられない。

このほか、ピットなどの遺構は確認できなかった。

《出土遺物》

出土した遺物は近世や近代の信楽焼の陶器が大半であり、土師器と須恵器も少量あった。ただし、出土した遺物のほとんどが著しく摩滅しているものばかりだった。

まとめ

平成 20 年 12 月に実施した試掘調査で確認した中世の集落の範囲を明らかにすることを目的に今回の調査に臨んだ。しかし、調査の結果、検出した遺構は水田耕作に関わるものばかりで、集落跡と判断できる遺構を確認することはできなかった。また、出土した遺物も摩滅が著しく、原位置をとどめるような状況ではなかった。

調査地は杣川の右岸にあたり、河川からの距離も近い。調査地周辺の地形を観察すると、現況の水田の並びが流路のようにみえる。実際に調査で確認した土層にも砂や砂礫の堆積があり、湧水を伴う箇所もあった。おそらく、調査地周辺は杣川の氾濫原となっていた時期があるのだろう。

今回の調査の結果、貴生川遺跡の中世集落は南側へは広がらないことが明らかになった。北側

隣接地の調査範囲と今回の調査範囲では約 2 ～ 2.5mほどの比高差がある。洪水対策などから一段高い場所に集落を営むことは、通常の考え方からすれば当然である。したがって、集落は北側に向かって広がっている可能性が高いと考えられる。

今後、北側の調査がさらに進展し、中世の集落の姿が明らかになることを期待したい。

【参考文献】

甲賀市教育委員会　2010 『甲賀市埋蔵文化財調査年報　平成 20 年度分』甲賀市文化財調査報告書第 11 集

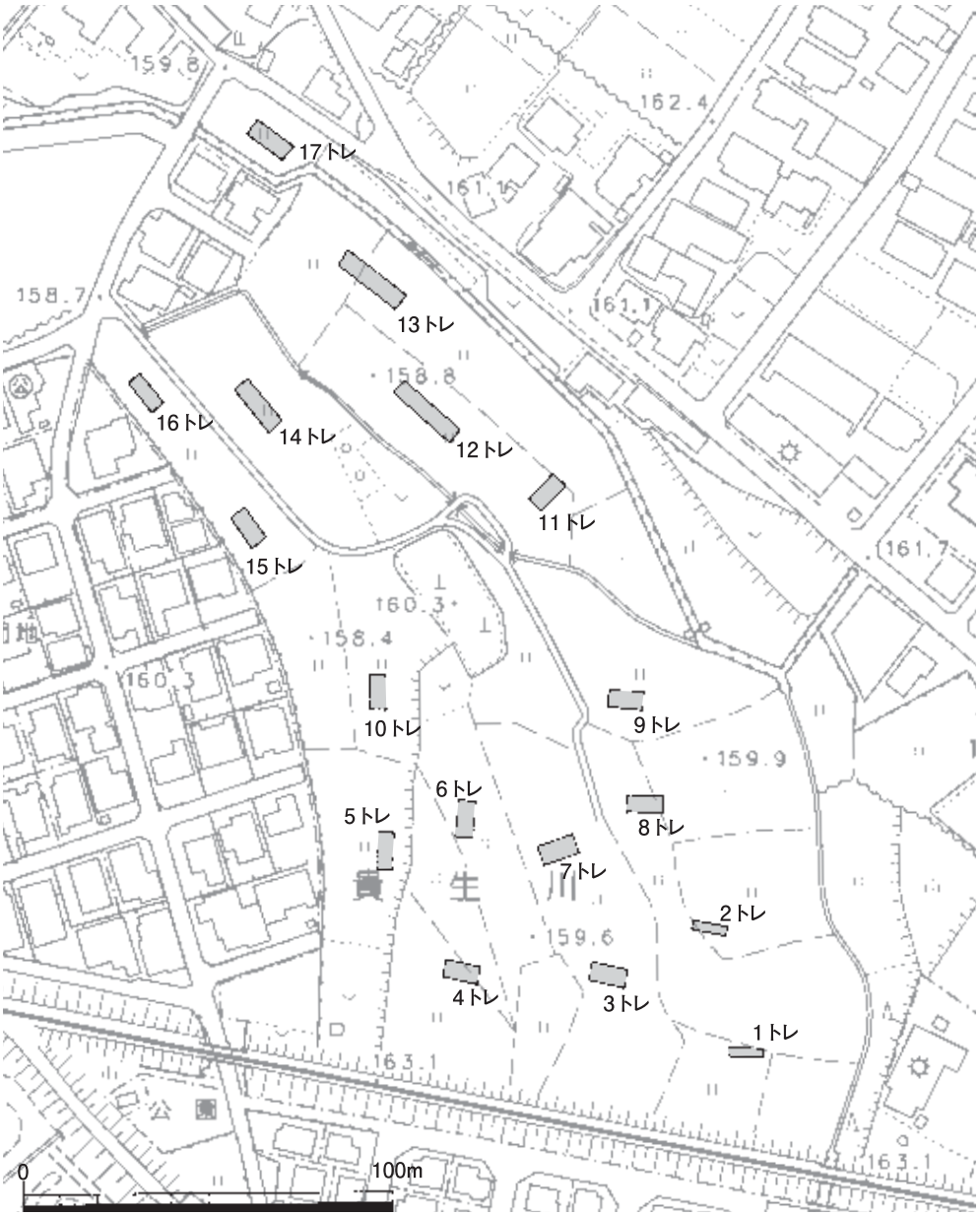


図 2　トレンチ位置図　1：2,000

第 3 章　09-07 次調査　北脇遺跡

調査経緯

水口町北脇地内において大規模店舗の建設が計画された。工事計画範囲は周知の埋蔵文化財包蔵地「北脇遺跡」の東半部にあたる。北脇遺跡は水口盆地中央部北端に位置し、過去の発掘調査によって 9 ～ 10 世紀の掘立柱建物や掘立柱塀などが確認されているほか、須恵器や緑釉陶器なども多数出土している。また、平成 18 年度に実施した第 5 次調査では青銅製の印鑑が出土して話題を集めた。この銅印は、平成 23 年 1 月 27 日に甲賀市指定有形文化財となった。

北脇遺跡のこれまでの調査は、主に遺跡の西半部で行われてきた。平成 18 年 9 月～ 11 月に北脇遺跡の西端部で実施した第 4 次調査では、9 世紀後半・10 世紀・12 世紀の 3 時期の掘立柱建物が確認され、9 世紀後半と 10 世紀の建物の中に鍛冶工房に関連するとみられる梁行 1 間 × 桁行 5 間の特徴的な建物が複数存在した。同じような建物は、近江国庁 C 地区（東郭）の調査でみつかっている（滋賀県教委 2004）。また、確証はないものの、同調査の報告書では、北脇遺跡を仁和 2 年以降の斎王群行における甲賀頓宮の可能性を指摘している（甲賀市教委 2008a）。

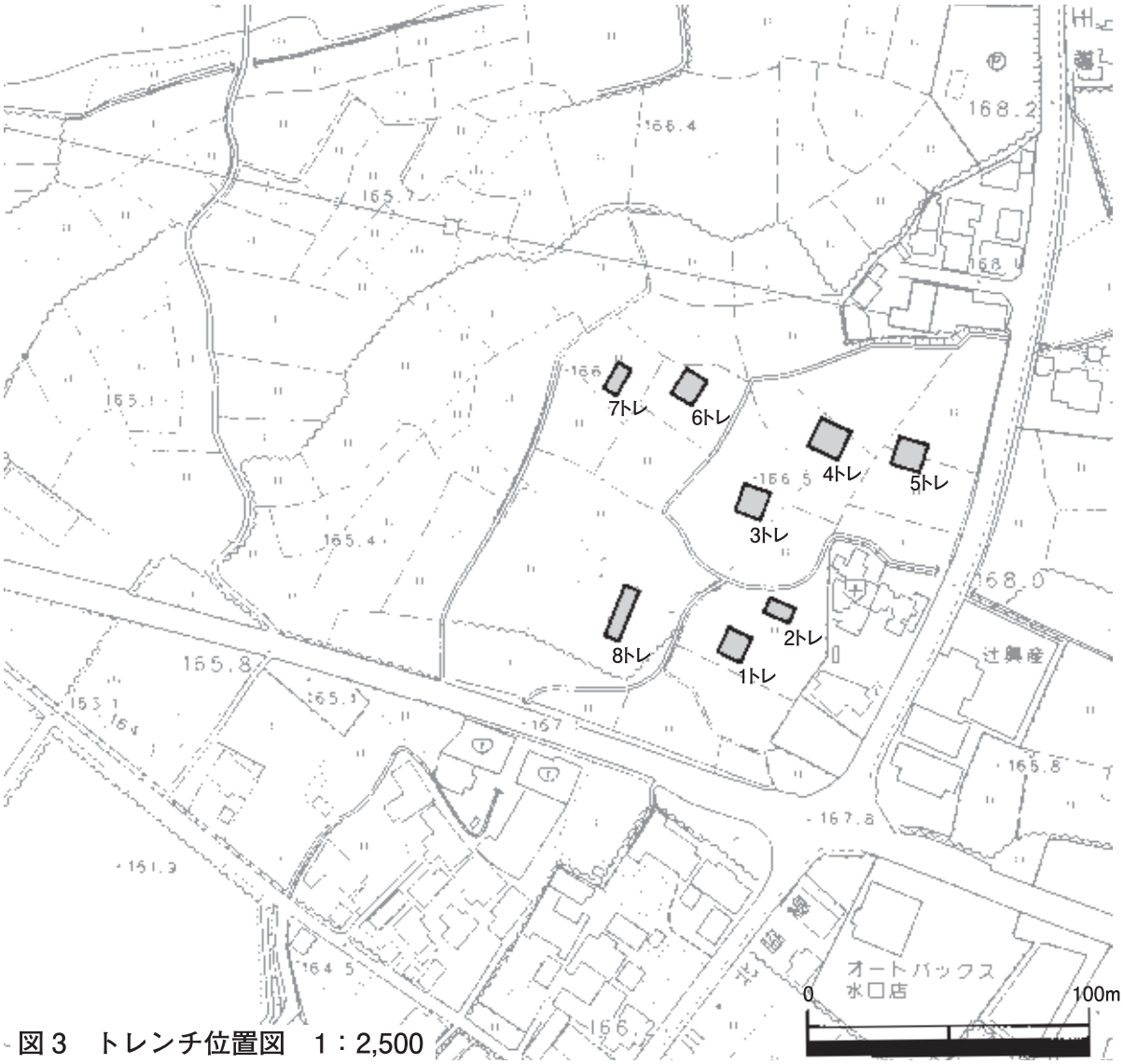


図 3　トレンチ位置図　1：2,500

平成 18 年 11 月～平成 19 年 1 月にかけて第 4 次調査の東側で実施した第 5 次調査では溝やピットなどを検出したが、掘立柱建物を確認することはできなかった。しかし、「徳西庶家」の銅印が出土したほか、緑釉陶器が多く出土した（甲賀市教委 2008b）。また、平成 19 年 2 月～ 3 月に第 5 次調査の隣接地で実施した第 7 次調査でも多くの緑釉陶器が出土し、北脇遺跡が通常の集落遺跡とは異なる様相をもつことが推測された（甲賀市教委 2008b）。さらに、第 5 次・第 7 次調査に隣接する第 12 次調査（平成 20 年 2 月～ 3 月・9 月～ 10 月に実施）では、9 ～ 10 世紀の掘立柱塀や溝と 12 世紀の掘立柱建物が確認され、第 4 次調査で確認された遺構の年代と符合する成果が得られた（甲賀市教委 2010）。

以上のように、北脇遺跡における過去の調査は遺跡の西半部を中心に展開され、東半部については調査の手が入っていなかった。しかし、現況の地形では東半部にも平坦地が広がり、むしろ西半部よりも平坦部が広いため、遺跡の中心は東半部に存在する可能性が考慮されてきた。今回の試掘調査の対象地は遺跡の東端部にあたり、北脇遺跡の性格を考える上で貴重な成果が得られるのではないかと期待された。

試掘調査は開発対象面積 18,050.08 ㎡に対して、トレンチ 8 ヶ所、合計面積 700 ㎡で実施し、平成 21 年 7 月 29 日に着手し、9 月 14 日に完了した。

調査概要

《基本層序》

調査地の基本層序は、上から①耕作土、②床土、③暗褐色または黒褐色粘質土、④黄灰色粘質土または淡灰褐色粘質土であった。④層が遺構面となり、遺構検出面の標高は 165.000 ～ 166.700m であった。調査地周辺の地形は西から東、南から北に向かって高くなっており、遺構検出面の高さも同様の傾斜を示していた。

また、③層は遺物を包含する 2 次堆積層であり、第 1 トレンチと第 8 トレンチでは確認できなかった。

《検出遺構》

第 1 ～ 6・8 トレンチで遺構を検出した。

第 1・2 ～ 4 トレンチで検出したピットはいずれも深さ 5 ㎝前後と浅く、掘形の形状が不整形なものが多い。また、黒ボク土が埋土となるものも多く、建物の柱穴ではなく、樹木の根などによる攪乱の可能性が高い。ピット内から遺物が出土しなかったことも傍証となる。

第 1・6 トレンチで検出した溝のほとんどは、幅 30 ㎝前後の水田暗渠であり、石を積めたものもあった。また、第 1 トレンチで幅 20 ㎝、深さ 10 ㎝の素掘りの溝を検出した。この溝からは 10 世紀の灰釉陶器が出土した。

表　09-07 次　調査トレンチ一覧表

トレンチ名	規模（㎡）	遺構面の標高（m）	遺物	遺構	備考
第 1 トレンチ	100.0	165.6 00	△	△	溝、ピット数基
第 2 トレンチ	50.0	165. 600	△	△	
第 3 トレンチ	100.0	165. 700	△	△	ピット数基
第 4 トレンチ	100.0	166.0 00	△	△	ピット数基
第 5 トレンチ	100.0	166. 600	△	−	ピット数基
第 6 トレンチ	100.0	166. 700	△	−	溝
第 7 トレンチ	50.0	165. 000	△	−	
第 8 トレンチ	100.0	165.200	△	△	

遺物・遺構の表示については、　− なし　△少しある　○ある

《出土遺物》

須恵器、土師器のほか、緑釉陶器、灰釉陶器、信楽焼などが出土した。出土遺物の大半は 2 次堆積層である③層から出土しており、遺構内から出土したものはごくわずかである。

まとめ

今回の調査では掘立柱建物や掘立柱塀などが確認できると期待されたが、調査の結果、建物や塀を確認することはできなかった。検出したピットのほとんどが黒ボク土を埋土とするものであり、調査面積に対しての遺構の密度はきわめて低い。また、遺構内から出土した遺物もわずかであり、大半の遺物が 2 次堆積層から出土している。

当初、北脇遺跡の中心部が発見できると期待していたが、調査結果は期待を裏切るものとなった。北脇遺跡の東端部は遺構の密度が低く、人々の活動の痕跡が乏しい地域であるとわかった。

今回の調査と過去の調査成果によって、北脇遺跡の範囲のうち、東部と西部については情報を得ることができたが、遺跡の中央部はまだ調査が行われていない。今後の調査によって北脇遺跡の全容が明らかになることを期待したい。

また、国道 1 号の南側にも平坦地が広がっている（北脇南遺跡）。第 4 次調査でみつかった鍛冶工房跡などと関連する遺構が南側へ展開することも考慮して、今後の調査を注意深くみていく必要があることを指摘しておく。

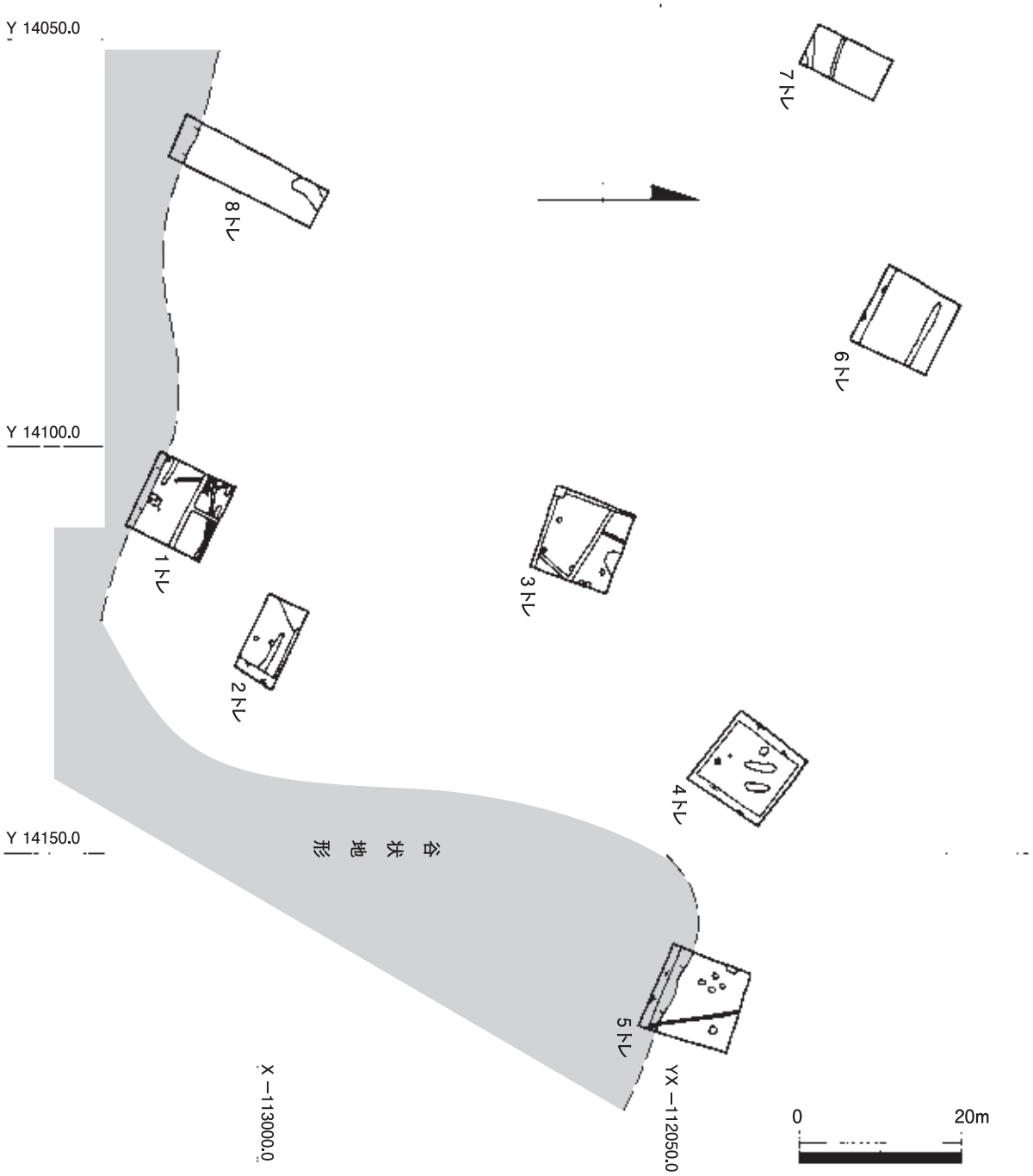


図４　調査平面図　１：800

【参考文献】

甲賀市教育委員会　2008a　『北脇遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第 9 集

甲賀市教育委員会　2008b　『北脇遺跡・西林口遺跡 発掘調査報告書』甲賀市文化財調査報告書第 12 集

甲賀市教育委員会　2010　『北脇遺跡第 12 次・下川原遺跡第 10 次 発掘調査報告書』甲賀市文化財調査報告書第 15 集

滋賀県教育委員会　2004　『史跡近江国庁跡 附惣山遺跡・青江遺跡 調査整備事業報告書』Ⅱ

第４章　09-09 次調査　東罐子塚古墳

調査経緯

東罐子塚古墳は甲賀市の北西部に位置し、水口丘陵の南端部に水口盆地を見下ろすように立地している。昭和 40 ～ 50 年代にかけて工業団地の建設計画があり、その際の分布調査によって発見された（丸山 1977）。西側に隣接して西罐子塚古墳があり、両古墳は泉古墳群として滋賀県指定史跡となり、現在は工場の敷地内に保存されている。

東罐子塚古墳は、尾根の先端を利用して築かれた 5 世紀前半の円墳である。直径 42m、高さ 5.5m、現状では埴輪も葺石も確認されておらず、木棺直葬の埋葬施設であったと推定されている（甲賀市史編さん委員会 2007）。

東罐子塚古墳の南側崖面では崩落している箇所がみられ、工場の進入路建設の付帯工事として、この崖面の補修工事を実施したい旨の連絡が工事事業者からあった。そのため、補修工事を行う崖面を対象として古墳築造に伴う墳丘盛土の有無や土層状況確認のための調査を実施した。調査は、崖面の東西幅約 33m、高さ約 1.4 ～ 1.7mの範囲で行った。

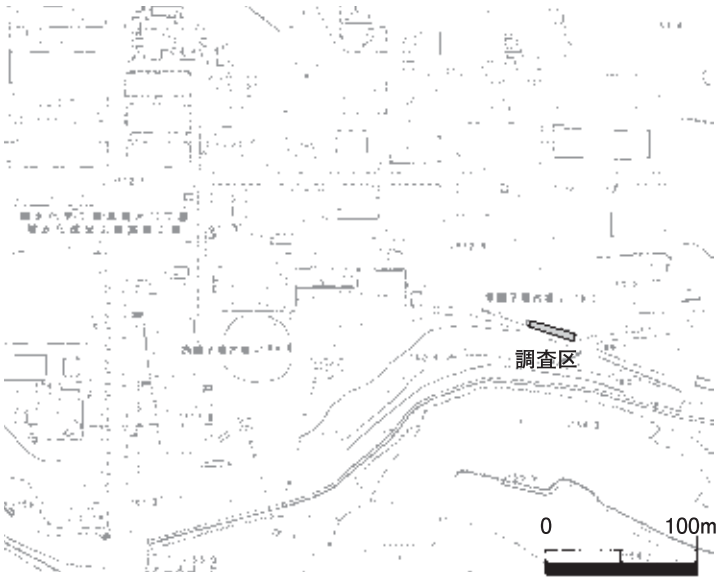


図５　調査位置図　1：5,000

調査概要

調査は崖面における土層観察を主として行ったため、トレンチを設定した調査ではなく、崖面の精査という形で行った。崖面における土層堆積状況は、厚さ約 10 ～ 15 cmの腐食土層を表土とし、その下層に淡黄橙色砂質土ないし暗橙色粘質土が厚さ約 25 ～ 70 cmで堆積し、それ以下は細砂や微砂、粘土の斜交層理堆積であった（図７）。

表土の腐食土層下の淡黄橙色砂質土・暗橙色粘質土の堆積は、樹木の根が入り込んだ軟質な土質で、表土層と一体の性質にあった。ま

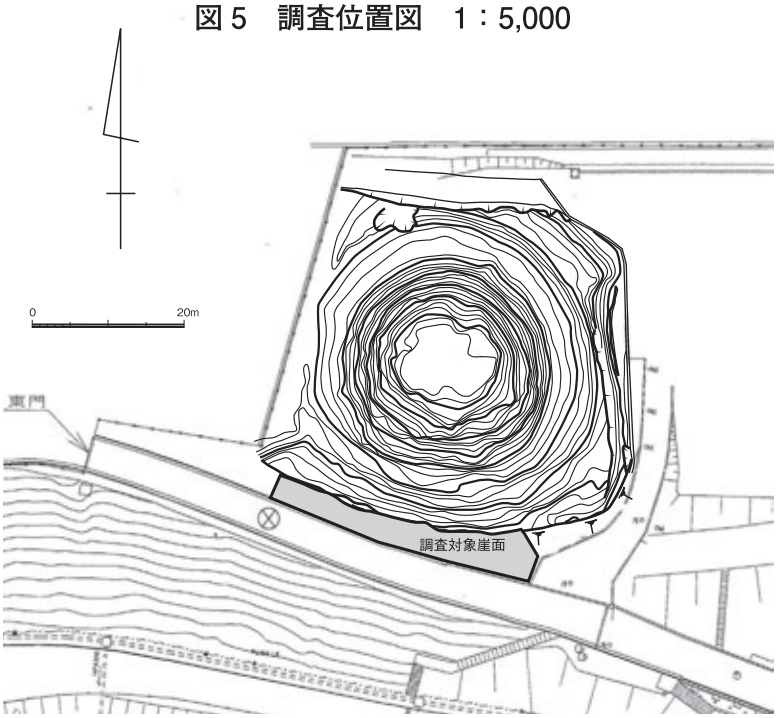


図6　調査トレンチ位置図　1：1,000

た、それ以下の土層は、円礫を粗く含む緻密な土質で、均一な堆積状況であった。

崖面の精査では、土層の堆積状況は把握したが、古墳に伴う周溝などの遺構を確認することはできなかった。また、古墳築造に伴う盛土と考えられる堆積を確認することもできなかった。

なお、今回の調査では埴輪や土器などの遺物はまったく出土しなかった。

まとめ

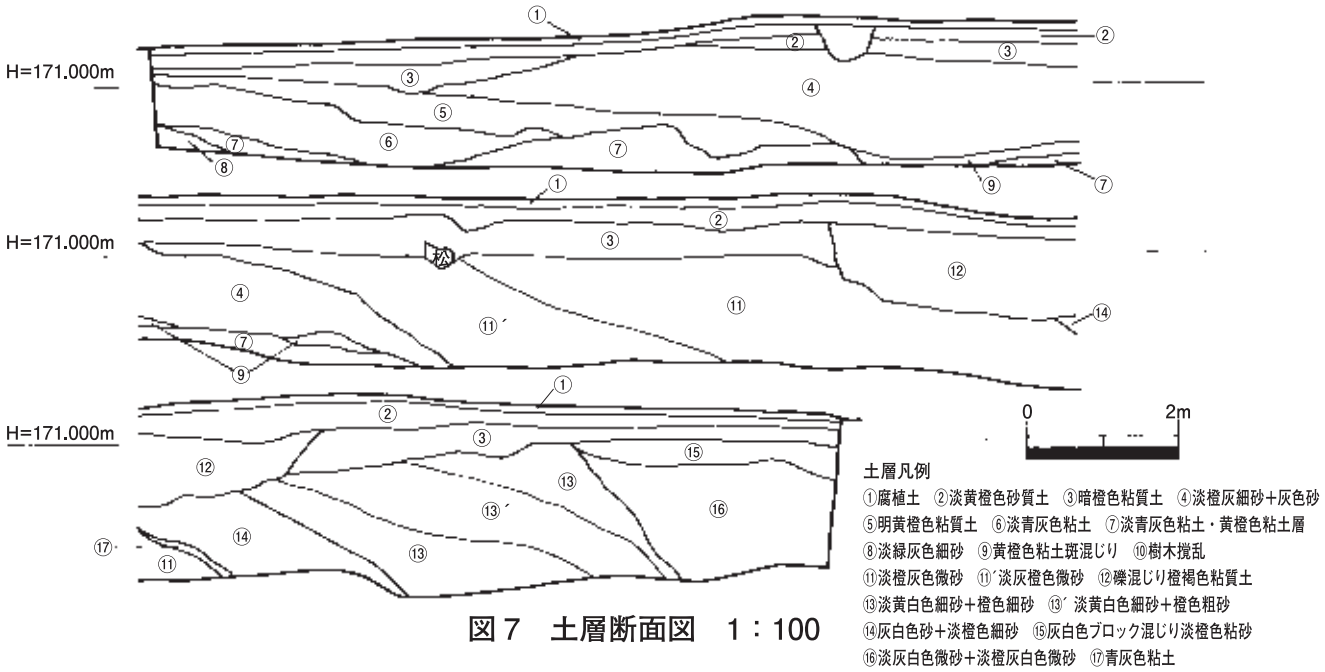


図７　土層断面図　１：100

今回の調査では丘陵の自然堆積の状況を確認したのみで、古墳築造に関わる情報を得ることはできなかったが、今回の調査範囲は墳丘の外側にあたり、崩落している崖面までは墳丘は延びていないことがわかった。このことから東罐子塚古墳の墳丘は、南側については現在保存されている範囲に収まると考えられる。

また、調査範囲内で周溝の痕跡などを確認できなかったことから、墳丘の南側には周溝がめぐっていないと推測される。丘陵の先端という立地条件から考えても異論はない。現況の地形が今回調査を行った崖面から南側に急激に落ちている状況は、古墳が築かれた当時の地形と大きく変わらないことも推測される。

東罐子塚古墳は、西罐子塚古墳と同じく水口盆地で最古の古墳であり、甲賀地域の古墳時代の社会構造を考える上で､非常な重要なものである。築造当初の墳丘が大きく削平されることなく、現在も保存されていることは非常に価値があり、今後も現状を改変することなく、保存し続けることが重要と考えられる。

【参考文献】

丸山竜平　1977　「甲賀郡水口町泉所在の古墳群」『滋賀県文化財だより』8　（財）滋賀県文化財保護協会発行

甲賀市史編さん委員会　2007　『甲賀市史』第１巻古代の甲賀 甲賀市発行

第 5 章　09-22 次調査　矢川寺遺跡

調査経緯

甲南町森尻、杣川右岸に位置する矢川神社境内には古代から近世にかけての複合遺跡が存在し、甲南町教育委員会によって過去 5 度の発掘調査が実施されている。

平成 5 年に実施された第 1 次調査では、中近世の寺坊跡の遺構を確認し、同年に行われた第 2 次調査では 15 ～ 16 世紀の遺物が出土した（甲南町教委 1994・1996）。また、平成 15 年と平成 16 年に実施された第 4 次・第 5 次調査では遺跡の性格を明らかにする遺構は検出できなかったが、石鏃などの石器類、7 ～ 8 世紀の須恵器などが出土し、中近世のみにとどまらず、広い時代の遺物が出土する遺跡であることがわかった（甲賀市教委 2005）。

また、矢川神社は古くから「矢川社」として文献資料にも多く登場し、とりわけ鎮守社として甲賀侍衆たちの結束を固める場として重要な役割を果たしてきたと言われている（甲賀市教委 2008）。このような観点から平成 21 年 7 月 23 日に矢川神社境内は甲賀郡中惣遺跡群のひとつとして国史跡に指定されている。

その矢川神社境内地内において、防火施設と避雷針の設置工事が計画された。同神社には国宝

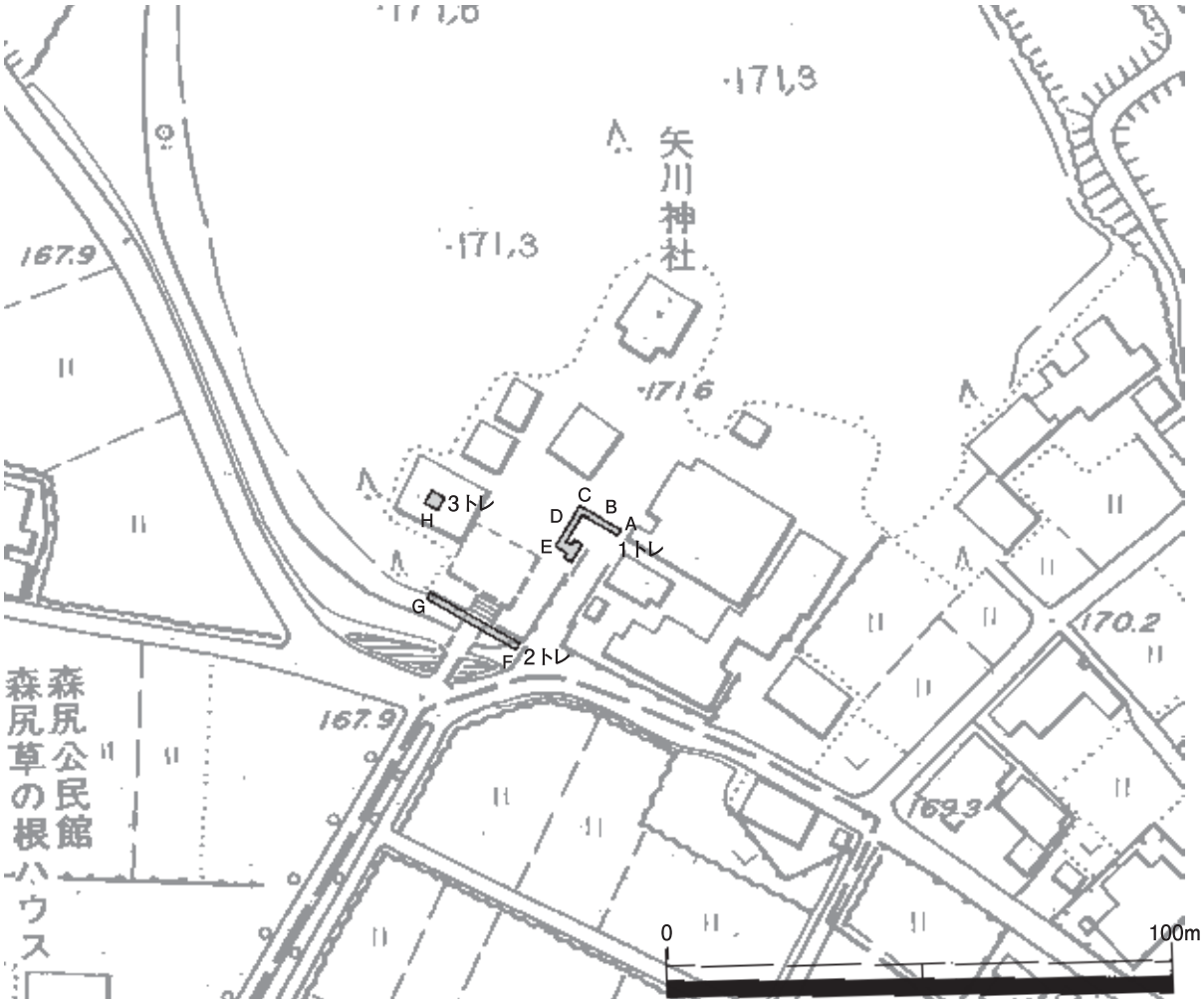


図 8　調査トレンチ位置図　1：1,500

の楼門など重要な建造物や文化財が多く存在し、文化財保護の観点からも防火施設や避雷針の設置はやむを得ないと判断されたため、同施設の設置の伴う土木工事範囲について遺構の有無を確認する試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、トレンチ３ヶ所、合計面積 34.6 ㎡で実施し、平成 22 年２月 15 日に着手し、３月 10 日に完了した。

調査概要

《基本層序》

第１トレンチ　上から①バラス、②山砂、③下層バラス、④淡灰褐色砂質土、⑤灰白色粘質土、⑥灰色粘質土、⑦茶褐色粘質土、⑧暗黄褐色粘質土（地山）であった。ただし、⑦層はＥ地点のみで確認でき、Ａ～Ｄ地点では確認されなかった。また、⑤層および⑥層から土師器や瓦の破片が出土した。

現況の地表面からおよそ 30 ～ 40 cmで⑤層または⑥層の上面に到達し、50 cm前後で⑧層となる。それ以下の土層に変化はなく、遺物も含まないことから地山であると考えられる。

第２トレンチ　上から①バラス、⑨黄褐色砂質土、⑩黄色ブロック混じり灰色粘質土、⑧暗黄褐色粘質土（地山）であった。第２トレンチから遺物の出土はなく、現況の地表面から 50 ～ 75 cmで⑧層に到達し、東から西に向かって低くなる傾斜となっていた。

第３トレンチ　上から⑪腐植土、⑫褐色砂質土、④淡灰褐色砂質土、⑥灰色粘質土、⑧暗黄褐色粘質土（地山）であった。第１トレンチと同様に⑥層から土師器や瓦の破片が出土した。現況の地表面から 60 cmで⑥層上面、70 cmで⑧層上面に到達する。

《検出遺構》

第１～３トレンチのいずれも非常に狭小な調査区であり、遺構を検出することはできなかった。

《出土遺物》

細片の土師器のほか、近世の瓦や陶器の破片などが出土した。しかし、矢川寺との関わりや中近世の寺坊遺構との関係を示す遺物を確認することはできなかった。

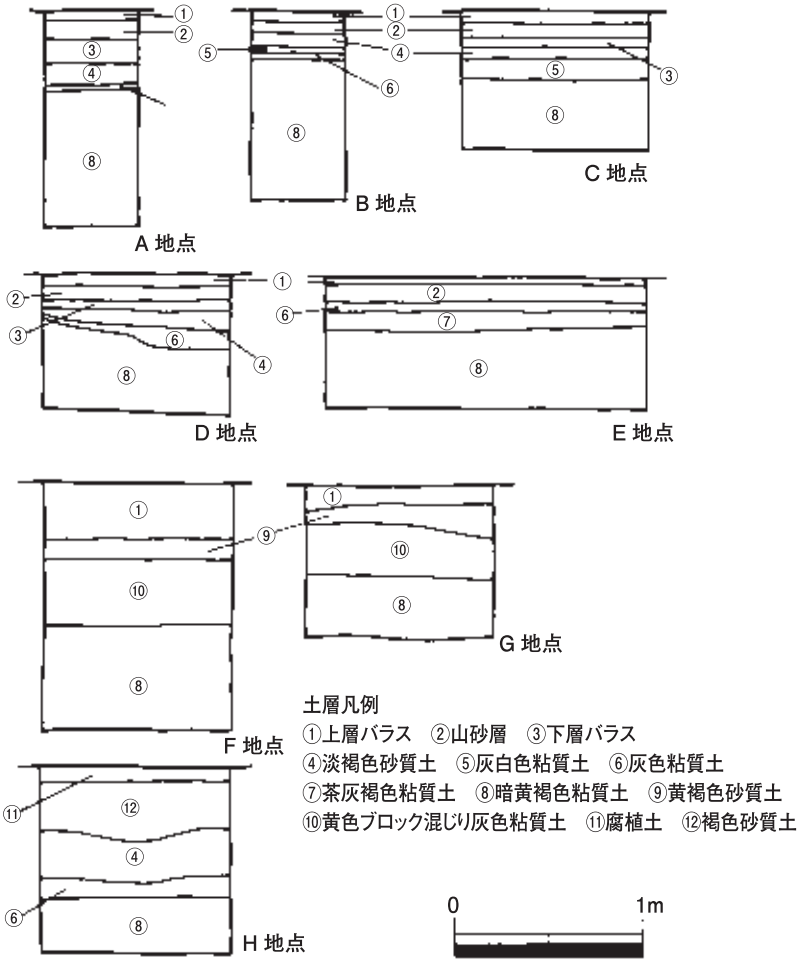


図９　土層断面図　1：40

まとめ

今回の調査は調査区が非常に狭小であったため、矢川寺や中近世の寺坊遺構と関係のある遺構や遺物を確認することはできなかった。

しかし、矢川神社境内の周辺からは多くの遺構や遺物が過去の調査で発見されており、この地が古代から近世にかけて重要な地であったことは明らかである。杣川にも近く、古くは矢川津もこの近くにあったと考えられている。

交通の要衝に立地し、古くから寺院が存在した当地に建つ矢川社が甲賀侍衆の信仰を集めるのは当然の帰結と考えられる。

今後、発掘調査が進展し、古代寺院「矢川寺」や甲賀郡中惣遺跡群の「矢川社」などの遺構が明らかとなっていくことに期待したい。

【参考文献】

甲南町教育委員会　1994　『矢川寺遺跡発掘調査報告書』甲南町文化財報告書第１集

甲南町教育委員会　1996　『平成５・６・７年度甲南町内遺跡発掘調査報告書』
甲南町文化財調査報告書第２集

甲賀市教育委員会　2008　『中世城館遺跡（甲南地区）調査報告書』甲賀市文化財調査報告書第11集

第 6 章　09-23 次調査　西林口遺跡

調査経緯

水口町西林口地内において宅地造成工事が計画された。当該地域は周知の埋蔵文化財包蔵地「西林口遺跡」の北半部にあたる。同遺跡は、北側の隣接地での工場建設に伴う試掘調査（平成 18 年 5 月 23 日～ 6 月 2 日、西林口遺跡第 1 次調査）で発見された遺跡で、工場建設によって遺構が破壊されると予想される 317 ㎡の範囲について記録保存の発掘調査を実施している（平成 18 年 12 月 20 日～平成 19 年 1 月 13 日、西林口遺跡第 2 次調査）。

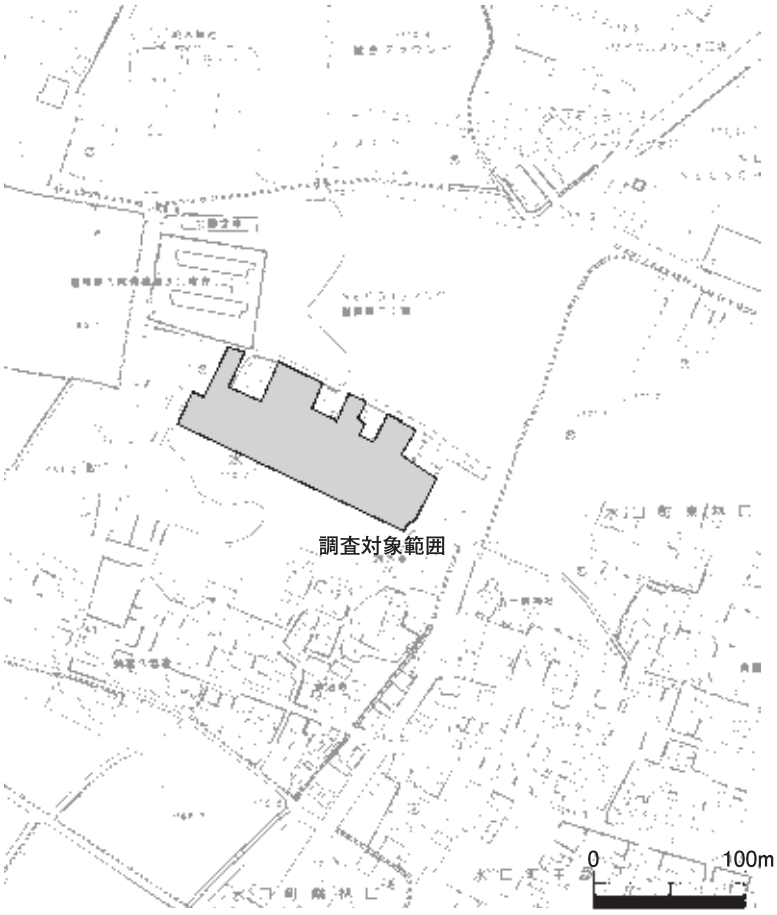


図 10　試掘調査対象範囲　1：5,000

上記の 2 度の調査では、柱穴や土坑などの遺構を確認するものの、掘立柱建物や掘立柱塀などは復原できなかった。しかし、遺構のベース面である黄褐色粘質土ないし茶褐色粘質土が南側に広がっている状況が推測され、遺跡の中心は当該調査の南側であると予想された（甲賀市教委 2008）。

今回の開発計画範囲は、2 度の調査から推定された遺跡の中心部である可能性が考えられたため、開発事業に先立ち、遺跡の有無を確認する試掘調査を実施することとした。

試掘調査は開発面積 9,980.94 ㎡に対して、トレンチ 11 ヶ所、合計面積 277 ㎡で実施した。トレンチの設定に際しては、調査実施段階で対象範囲の一部において畑作が行われていたため、その範囲を除外して可能な限り対象範囲全体に対して万遍なく調査が行えるように配慮した。

調査は平成 22 年 2 月 24 日に着手し、3 月 11 日に完了した。

調査概要

各トレンチの概要を一覧表にまとめると以下のようになる。

表　09-23 次　調査トレンチ一覧表

トレンチ名	規模（㎡）	遺構面の標高（m）	遺物	遺構	備考
第 1 トレンチ	25.0	169.650	−	△	耕作にかかわる痕跡
第 2 トレンチ	9.0	169.700	△	△	近代以降の土坑
第 3 トレンチ	32.0	170.000	○	△	近代以降の土坑
第 4 トレンチ	21.0	169.950	△	−	近世の陶器
第 5 トレンチ	10.0	170.050	−	−	
第 6 トレンチ	16.0	170.100	−	−	
第 7 トレンチ	30.0	170.180	△	−	土師器（摩滅著しい）
第 8 トレンチ	30.0	170.200	△	−	土師器（摩滅著しい）
第 9 トレンチ	39.0	170.300	△	○	ピット数基、近代以降の土坑
第 10 トレンチ	50.0	170.360	△	−	土師器・瓦器（摩滅著しい）
第 11 トレンチ	15.0	170.500	△	△	近代以降の溝

遺物・遺構の表示については、　−なし　△少しある　○ある

図 11　調査トレンチ位置図　1：2,000

《基本層序》

基本層序は上から①耕作土、②床土、③黄褐色粘質土（遺構検出面）、④灰褐色砂礫、⑤灰色粗砂であった。遺構検出面である③層の標高は 169.500 ～ 170.500mで、調査地の東から西に向って低くなっている。調査地周辺の現況の地形が東から西に向かって低くなる傾向にあるのと同じである。

《検出遺構》

第 1 ～ 3・9・11 トレンチで遺構を検出したが、そのほとんどが畑の耕作にかかわる遺構や、近世もしくは近代以降の土坑や溝であった。

第 9 トレンチで数基のピットを検出したが、そのほとんどは深さ 5 ㎝前後と浅く、平面形・断面形とも不整形で、埋土が黒ボク土であることから、人為的なものではなく、木の根などによる撹乱と考えられる。それ以外のピットはごく少数で、掘立柱建物や掘立柱塀となるまとまりは確認できなかった。また、ピット内から時期を明確にする遺物は出土しなかった。

今回の調査では 11 ヶ所のトレンチすべてにおいて、中世以前と判断できる遺構は確認できなかった。

《出土遺物》

土師器・瓦器のほか、信楽焼・陶器・桟瓦などが出土した。土師器や瓦器は細かな破片が多く、かつ摩滅も著しく、2 次堆積によるものが大半である可能性が高い。

また、遺構内からは時期を特定できる遺物の出土がなく、遺構の年代を推定できる資料を得ることはできなかった。

まとめ

試掘調査の結果、調査対象地の一部で遺構と遺物を確認したが、近世や近代以降の遺物を伴う土坑や溝以外は、明確に時期を特定できる遺物を伴う遺構はほとんどなかった。第 9 トレンチにおいて、数基のピットを確認したが、そのほとんどが黒ボク土を埋土とする木の根などの撹乱によるものと考えられる。それ以外のピットはごく少数で、建物などを形成する様子は確認できなかった。

今回の調査では、遺跡の性格や年代を知り得る資料を発見することはできなかった。しかし、遺構検出面である③層（黄灰色粘質土）は調査地外へさらに広がる様相を示しており、細片ではあるが、土師器や瓦器などの遺物が出土することから考えて、調査地周辺に西林口遺跡の中心部が存在する可能性は推測できる。

今回の調査地の南側には近世東海道が通っている。南東約 500mには水口城跡があり、古くから人々が生活していた痕跡が残っている。このようなことを考え合わせても西林口遺跡の中心部が今回の調査地の周辺に存在する可能性は高いと思われる。今後の調査の進展に期待したい。

【参考文献】

甲賀市教育委員会　2008 『北脇遺跡・西林口遺跡 発掘調査報告書』甲賀市文化財調査報告書第 12 集

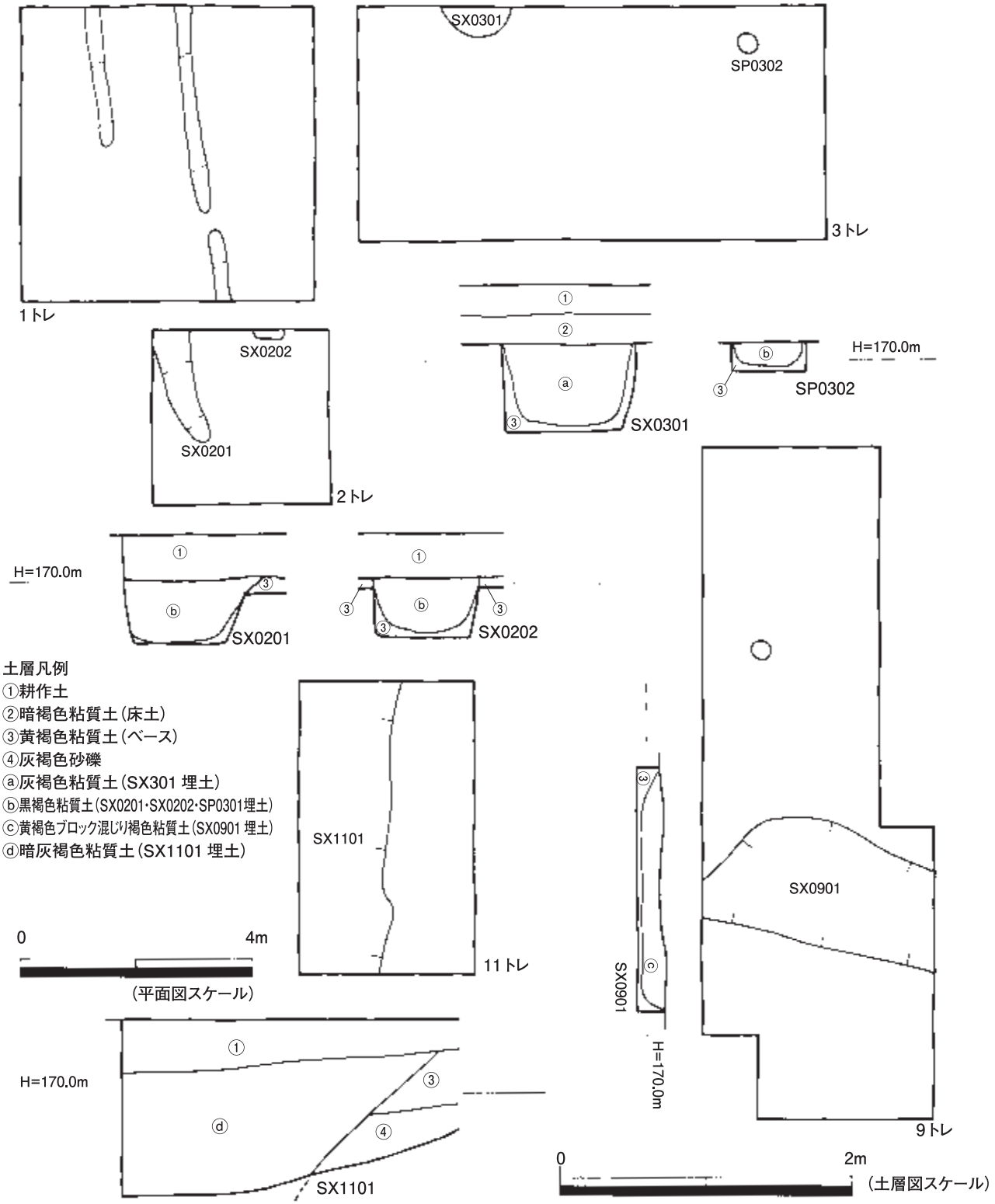


図 12　平面図（1：100）・土層図（1：40）

第 7 章　宮町遺跡第 38 次・第 39 次調査

第 1 節 史跡紫香楽宮跡 (宮町遺跡第 38 次) 発掘調査

調査地は、朝堂東脇殿の北方約 50m に位置し、これまでの調査で朝堂北方には大きな二面庇建物の確認されていることや遺構の密度などから、紫香楽宮での内裏的性格をもつ区画に相当すると推定されたため確認調査を実施した。

調査は平成 20 年 12 月 17 日から開始し平成 21 年 3 月 31 日に終了した。また調査中の 3 月 8 日に現地説明会を開催し、約 80 名の参加者があった。

検出遺構

調査では、紫香楽宮に関連する主な遺構として、建物 2 棟と塀跡 3 条を確認した。

SB38001 ･･･ 方位を N2°10′W にとる東西 4 間以上 × 南北 2 間の東西棟の掘立柱建物である。

柱間寸法は梁行、桁行とも約 3.0m（10 尺）、柱掘形はやや不整形だか、1 辺約 1.0m 前後の方形の規模である。SB38002 と東辺を揃えることや棟間距離が約 13.3m（45 尺）である。

SB38002 ･･･ 方位を N2°49′W にとる東西 5 間 × 南北 3 間の東西棟の掘立柱建物である。

柱間寸法は梁行 1.95m（6.6 尺）× 桁行約 3.0m（10 尺）、柱掘形は 1.2m×1.1m 程度の方形で、柱の多くは抜き取られていたが、平面規模は SB38001 とほぼ同じである。

SA38007 ･･･ 2 棟の建物から約 2.5m 東に位置する南北方向の掘立柱塀で、方位を約 N3°53′W を測る。

柱掘形は 1 辺 1.0m×0.9m 程度の方形で、基本的な柱間寸法は 3.0m（10 尺）だが、途中に 4.5m（15 尺）間隔の場所が 2 箇所あり、開口部と考えられる。

今回の調査地で確認した長さは 11 間（約 35m）分であったが、第 13 次調査第 1302 トレンチ南側ので検出した SA13257 の南側延長と見られ、推定総延長は 61m 以上を測る。

SA38028 ･･･ SA38007 から約 6.7m 東に位置する掘立柱塀で、東西 2 間以上 × 南北 2 間以上、方位を約 N0°57′W にとる。柱掘形は 1 辺 1.0m×0.9m 程度の方形で、柱間寸法は、東西方向が 3.0m（10 尺）、南北方向が 4.5m（15 尺）ある。

紫香楽宮関連遺跡の調査では、庇付大型建物以外で柱間寸法が 12 尺以上の事例がないことから、建物ではなく塀跡の可能性が高い。

SA38029 ･･･ SA38007 から 3.1m 西に位置する東西方向の塀跡で、方位を約 N10°E にとる。柱掘形は 1.1m×1.0m 程度の方形で、柱間寸法は、3.1m（10.5 尺）を計る。

まとめ

調査の結果、2 棟の建物規模は、これまでに確認した建物との比較から、紫香楽宮の官衙として最も一般的な規模であり、東辺を揃え、整数値に近い建物間隔を持つことなどから 2 棟が意図的に配置されていたことが推測できる。また、2 棟の建物遺構規模の比較では SB38002 の掘形や柱穴が大きく、梁間を 3 間にしていることなど違いも認められることから、南側に位置する SB38002 が上位の建物であったと考えられる。

紫香楽宮跡関連遺跡の発掘調査では、2 棟の東西棟が南北に意図的に配置されている事例として、宮町遺跡第 31 次調査の SB31045・31023 や鍛冶屋敷遺跡の第 8 次調査の SB08001・08002 があげられ、紫香楽宮の官衙配置類型の 1 つと推定できる。①

SA38007 は、他の遺構と比較してやや西に方位が傾くが、同様の傾きをもつ遺構として調査地の東北東に 65mで離れた地点で確認した第 12 次調査の SA1216 があげられ、柱間寸法や掘形規模も類似していることから同一の空間を区画する塀跡の可能性がある。その場合塀跡としている SA38028 は、建物になる可能性がある。

SB38002 の建物妻側口に近接して塀 SA38007 があることから、両者は同時に存在しない可能性が高いが、建物位置と塀の開口部は近接していることから、全体の区画利用計画には大きな変更がなく、同一計画で建設されたことが窺えるが、遺構配置に重複している部分がないため、どちらが先行するかは不明である。

今回の調査で確認した建物は、建物規模から実務的官衙と考えられるが、紫香楽宮の全体像が判明していない中では、この施設が内庭官衙か政庁に伴う官衙なのか決定するには至らなかった。

しかし、調査地周辺で区画の作り変えが想定され、これまでの調査成果を考慮すると朝堂北方区画の広い範囲で計画変更があったことが推測できる。

註① 「鍛冶屋敷遺跡の調査」『甲賀市埋蔵文化財調査年報平成 20 年度分』2010 甲賀市教育委員会

第 2 節　史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第 39 次）発掘調査

平成 21 年度は紫香楽宮の西側への広がりを確認するために宮町盆地西側の史跡指定範囲外、800 ㎡を調査した。調査地は中心建物中軸線より西へ約 350m に位置し、調査は平成 21 年 12 月 21 日から開始し平成 22 年 3 月 31 日に終了した。

検出遺構

調査の結果、平安から中世頃と考えられる 3 本の南北溝、中世と考えられる掘立柱建物 2 棟、小穴を検出した。

SD39101 ･･･ トレンチ東半から中央で検出した南北溝。検出幅 5m ～ 8m、検出面からの深さ約 0.7m を測る。最下層の灰色粗砂層からは 13 世紀前半頃と考えられる瓦器碗、土師器小皿が出土する。遺構の主軸方位は N44°50′E を測る。

SD39102 ･･･ トレンチ東半で検出した南北溝。検出幅 6m ～ 7m、検出面からの深さ約 0.8m を測る。最下層の黄灰色粗砂層からは平安時代と考えられる灰釉陶器が出土する。遺構の主軸方位は N5°45′E を測る。

SD39103 ･･･ トレンチ西端で検出した南北溝。西岸はトレンチ外へ広がるため全幅は不明であるが、トレンチ内で幅 13m 分を検出した。検出面からの深さ約 0.6m を測る。最上層の暗褐色粘質土からは瓦器、土師器、須恵器が出土する。暗褐色粘質土以下の層からは木片等の有機物が大量に出土するが、木製品･土器等の遺物は含まれない。遺構の主軸方位は N21°45′E を測る。

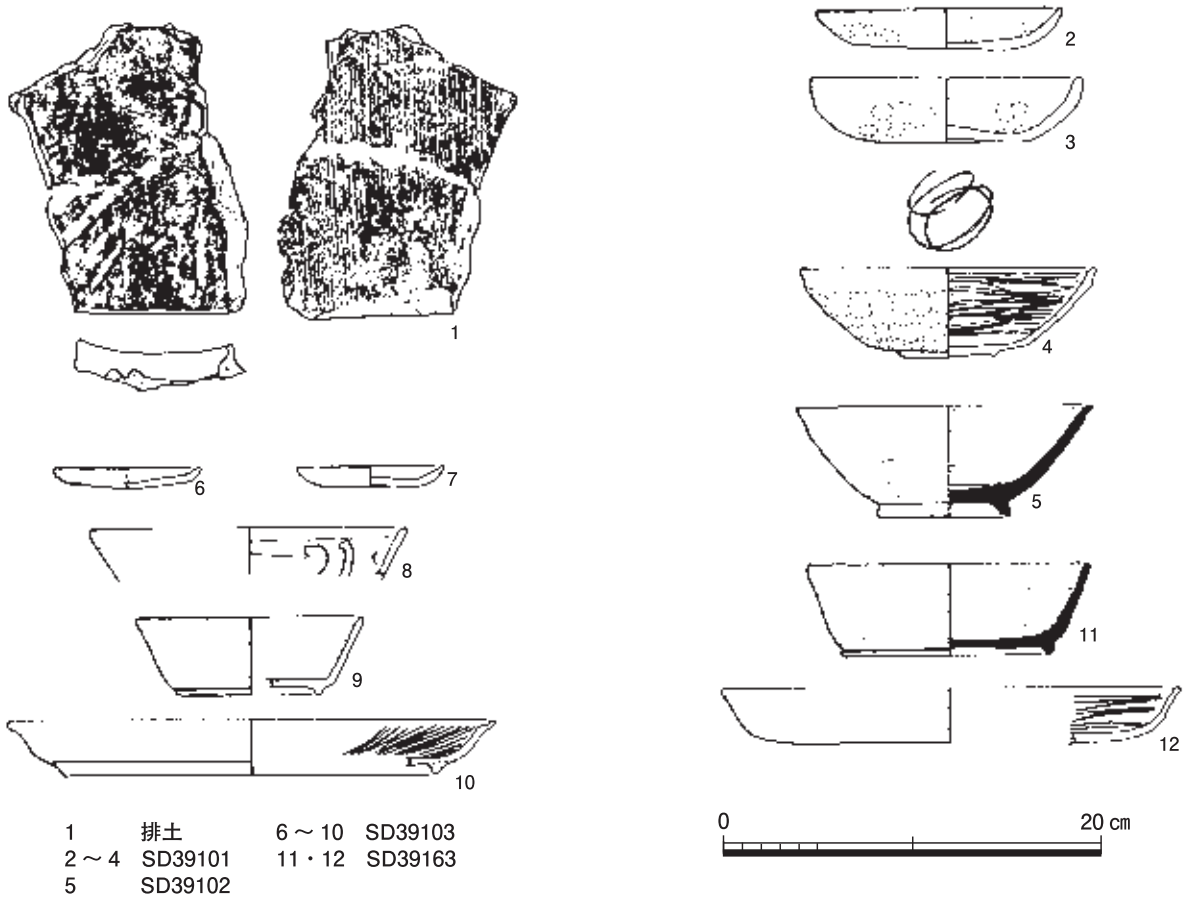
このほかトレンチ南西端で、ほ場整備以前の旧西出川の流路を検出した。埋土には近現代の信楽焼が含まれ、奈良時代の遺物は出土しなかった。

SB39121 ･･･ トレンチ北半で検出した南北棟掘立柱建物で、梁行 1 間（2.4m）× 桁行 2 間（4m）の規模をもつ。掘形は径 20cm ～ 40cm 程度の円形で、断割調査をおこなった箇所では、検出面からの深さ約 20cm を測る。掘形内から土器は出土しなかったが、掘形の平面形、建物の規模から中世頃の建物と考えられる。

SB39122 ･･･ トレンチ北半で検出した南北棟掘立柱で、梁行 1 間（2.4m）× 桁行 2 間（5m）の規模をもつ。掘形は 50cm 程度の円形～長円形で、内部に径 20cm 程度の柱痕跡が認められる。このほか径 20 ～ 50cm の小柱穴を検出したが、調査区内では建物等には復原できなかった。SB39122 の東北端付近に位置する直径 40 ㎝、深さ 35 ㎝の柱穴、SP39163 から 8 世紀中頃の杯 B が出土しており、紫香楽宮期においてもなんらかの土地利用をおこなっていた可能性が考えられる。

まとめ

調査区内では明確な紫香楽宮期の建物等の遺構は発見されなかったが、8 世紀と考えられる須恵器等の遺物が一定量出土すること、覆土中にそれらが含まれる柱穴が存在することから、紫香楽宮期においても、西大溝以西においても、ある程度の土地利用の痕跡がうかがえる。



1	排土	6 ～ 10	SD39103
2 ～ 4	SD39101	11・12	SD39163
5	SD39102		

図 13　宮町遺跡第 39 次調査出土遺物

図 15　史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡）調査位置図　1：4,000

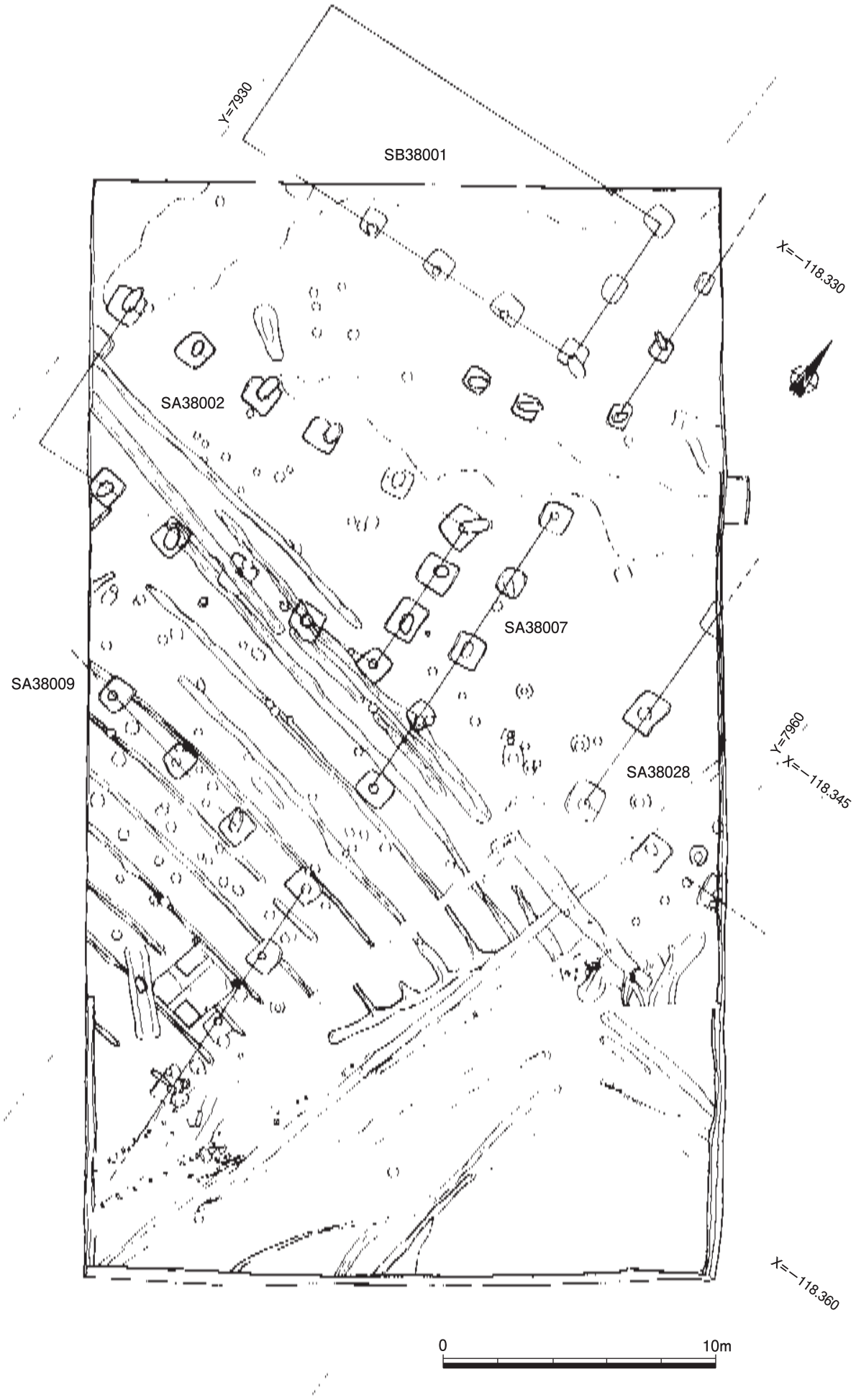


図 16　史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第 38 次調査）　遺構実測図

図 17　史跡紫香楽宮跡（宮町地区）中心区画周辺遺構配置図

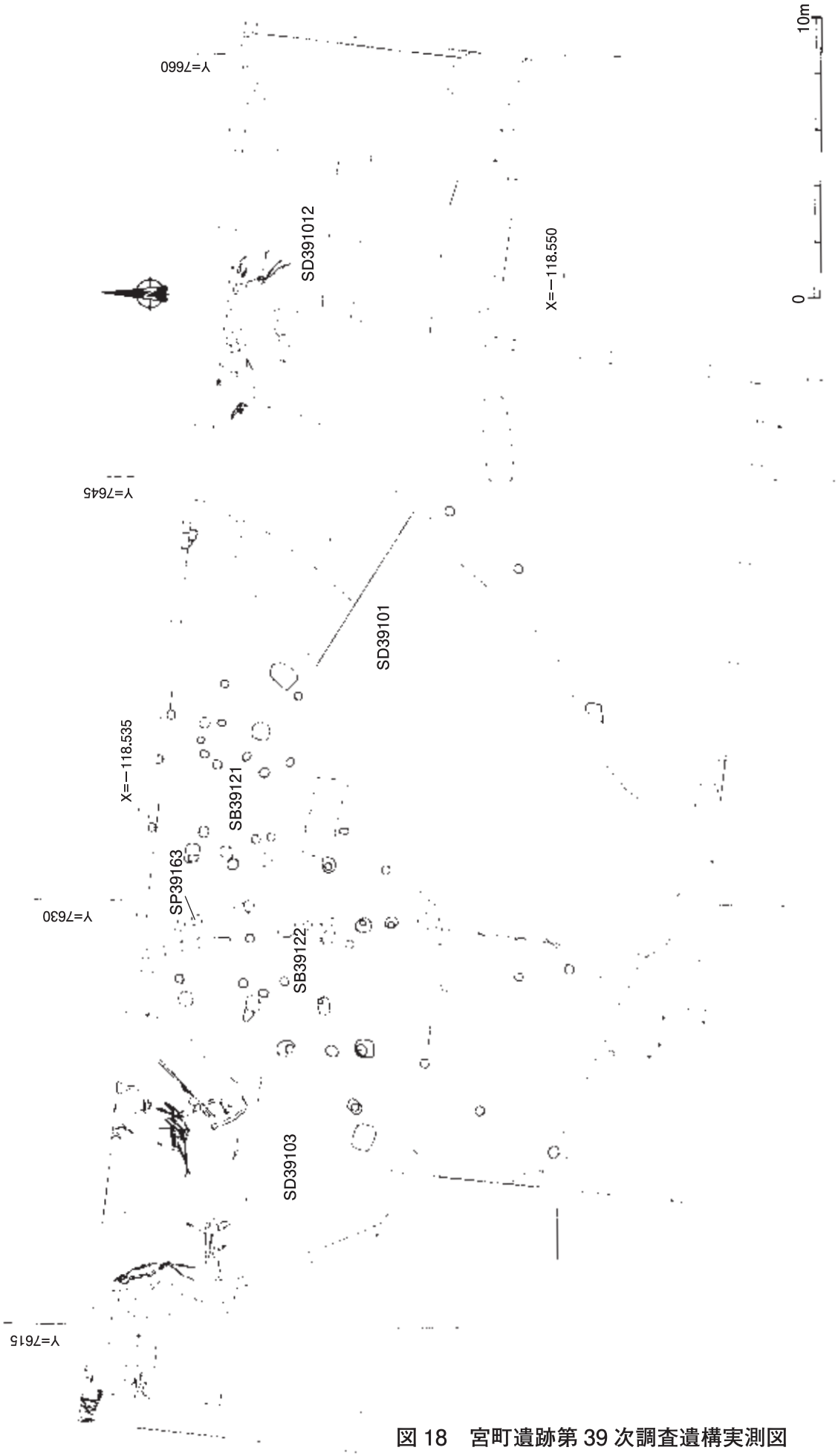
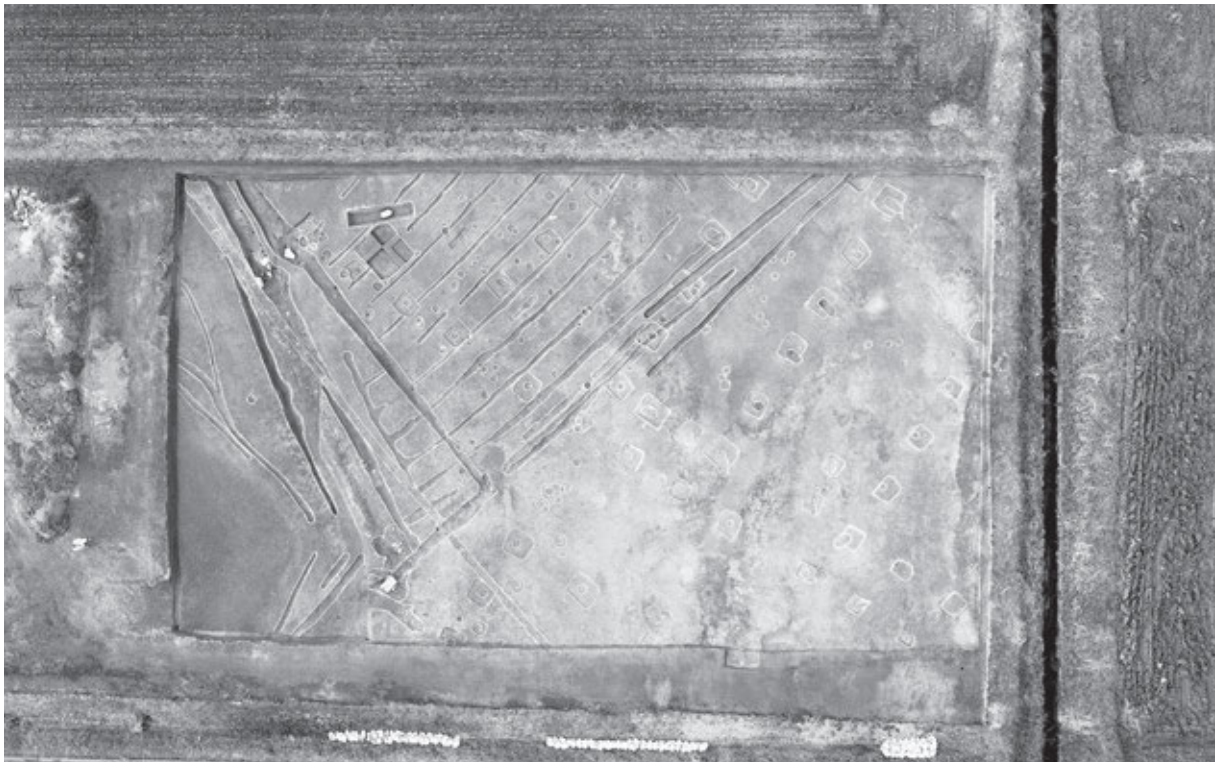


図 18　宮町遺跡第 39 次調査遺構実測図



史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第 38 次調査）調査地全景

史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第 38 次調査）調査地全景（東から）

史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第 39 次調査）調査地全景

史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡第 39 次調査）調査地全景（北から）

報告書抄録

ふりがな	こうかしまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	甲賀市埋蔵文化財調査年報
副書名	平成21年度試掘調査　宮町遺跡第38・39次調査
巻次	
シリーズ名	甲賀市文化財報告書
シリーズ番号	第18集
編著者名	鈴木良章　小谷徳彦
編集機関	甲賀市教育委員会
所在地	滋賀県甲賀市甲南町野田８１０番地
発行年月日	平成23年(2011年)3月25日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査面積(㎡)	調査期間	調査原因
貴生川遺跡（きぶかわいせき）	甲賀市水口町貴生川（こうかしみなちちょうきぶかわ）	25209	363-91	34° 57′ 17″	136° 8′ 55″	900	2009.6.15～2009.7.10	土地区画整理
北脇遺跡（きたわきいせき）	甲賀市水口町北脇（こうかしみなくちちょうきたわき）	25209	363-033	34° 58′ 55″	136° 9′ 17″	700	2009.7.29～2009.9.14	店舗建設
東罐子塚古墳（ひがしかんすづかこふん）	甲賀市水口町泉（こうかしみなくちちょういずみ）	25209	363-020	34° 59′ 13″	136° 8′ 2″	50	2009.8.19～2009.8.20	崖面補修工事
矢川寺遺跡（やがわじいせき）	甲賀市甲南町森尻（こうかしこうなんちょうもりじり）	25209	366-006	34° 56′ 6″	136° 9′ 48″	36.4	2010.2.15～2010.3.10	防災設備設置
西林口遺跡（にしはやぐちいせき）	甲賀市水口町西林口（こうかしみなくちちょうにしはやしぐち）	25209	363-101	34° 58′ 31″	136° 9′ 39″	277	2010.2.24～2010.3.11	宅地造成
宮町遺跡（みやまちいせき）	甲賀市信楽町宮町（こうかししがらきちょうみやまち）	25209	367-033	34° 56′ 9″	136° 4′ 59″	850 800	2008.12.17～2009.3.31 2009.12.21～2010.3.31	内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
貴生川遺跡	集落	中世		土師器、須恵器、信楽焼	
北脇遺跡	集落	古代	溝、ピット	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器	
東罐子塚古墳	古墳	古墳			
矢川寺遺跡	神社	中世		土師器、陶器、瓦	
西林口遺跡	集落	古代	ピット、土坑、溝	土師器、須恵器、瓦器、陶器	
宮町遺跡	宮殿・官衙	古代	掘立柱建物、柵、溝	土師器、須恵器、瓦器、陶器	

甲賀市文化財報告書第 18 集

甲賀市埋蔵文化財調査年報

平成 21 年度試掘調査　宮町遺跡第 38 次・39 次調査

印刷・発行　2011 年 3 月 25 日

編集・発行　甲賀市教育委員会

滋賀県甲賀市甲南町野田810番地

TEL　０７４８－８６－８０２６

FAX　０７４８－８６－８２１６

印　　刷　村田印刷株式会社